

現代詩詩論研究会「谷川雁」 資 (2014・12・13)  
(テキスト・現代詩文庫『谷川雁詩集』思潮社)

谷川雁―五〇年代の詩と詩論から

彦坂美喜子  
(傍線はすべて筆者・彦坂)

### 【詩集】

※詩集発行順

・『大地の商人』一九五四年十一刊 母音社

・『天山』一九五六年・国文社刊(一九四五年〜四八年の作品を

収める)

・『谷川雁詩集』(「天山」・「大地の商人」・「伝達」を含む)

一九六〇年刊。国文社

※作品制作年代順・・・①『天山』②『大地の商人』③「伝達」

『谷川雁詩集』

### 【評論集】

『原点が存在する』一九五八年・十二 弘文堂

「原点が存在する」(一九五四年五月「母音」第十八冊)

「農村と詩」(一九五八年四月二三日「東大新聞」復刊四三号)

「現代詩の歴史的自覚―戦後意識の完結をめぐって」

(一九五八年七月「新日本文学」)

『影の越境をめぐって』一九六三年・現代思潮社

※「断言的肯定命題」所収(「詩学」一九六一年四月号)

「権力止揚の回廊―自立学校をめぐって」

(「試行」一九六二年一〇月)

「地方―意識空間として」(「思想」一九六三年四月号)

《詩を読む》

★原点とは何か(「原点が存在する」)

『天山』―「原点」前段階の詩(谷川雁の思想の萌芽をこれらの詩

のどこに見るか)

『大地の商人』―「原点」の思想の背景として

(原点とは何か、詩の言葉と思想について)

★「伝達」の詩(『谷川雁詩集』未発表詩群「伝達」を含む)

・評論「農村と詩」

・評論「現代詩の歴史的自覚―戦後意識の完結をめぐって」

\*「わが代表作」(一九五七年八月「詩学」臨時増刊 掲載)

\*「無を噛みくたく融合へ―現代詩がめざしているもの―」

(一九五八・六月「文学」

★「瞬間の王は死んだ」(『谷川雁詩集』あとがき)として

詩作をやめた以後

・評論「権力止揚の回廊―自立学校をめぐって」(一九六二)

・評論「地方―意識空間として」(一九六三)

\*評論「断言的肯定命題」(一九六一)

★詩集

『天山』一九五六年・国文社刊

(一九四五年～四八年の作品を収める)

或る光栄

おれは村を知り 道を知り  
灰色の時を知った  
明るくもなく 暗くもない  
ふりつむ雪の宵のような光のなかで  
おのれを断罪し 処刑することを知った  
焰のなかに炎を構成する  
もえない一本の糸があるように  
おれはさまざまな心をあつめて  
自ら終ろうとする本能のまわりで焚いた  
世のありとある色彩と  
みおぼえのある瞳がみんな  
苦悩のいろに燃えあがったとき  
おれは長い腕を垂れた  
無明の時のしるしを  
額にながしながら おれはあるきだす  
歩いてゆくおれに  
なにか奇妙な光栄が  
つきまといでもするといふのか

@北川透(「夢みられたコンミュニオン」『幻野の渴き』一九七〇 思潮社)

谷川が「おれは村を知り……」と言ったときの「村」には、おそらくいささかの実体性もない。彼の夢の開示がそこで始まったとみるべきであり、「村」とはむしろ見えない「村」なのだ。そのような「村」であることによって、はじめて「ふりつむ雪の宵のような光のなかで／おのれを断罪し 処刑することを知った」という次に接続していく非現実の世界との内的なつながりを得るのである。谷川は自己の内なる私有意識、自我を処刑するにふさわしい場のイメージとして、「村」を求めたのであり、それはまた別に言えば、優しさの極致としての「村」を夢見ることによって、自我処刑の責苦に耐えようとしたのである。処刑されようとする自我が映し出す世界は「世のありとある色彩と／みおぼえのある瞳がみんな／苦悩のいろに燃えあがったとき／おれは長い腕を垂れた」というような痛切なイメージで染められている。しかし、この自我処刑の痛みのイメージが少

しも悲劇的でなく、祭りの宵のようなはなやかな明るさを感じさせるのは、それが夢みられた（村）の優しさのひとつのものであるからだろう。そしてこれが谷川雁の詩意識の原質をかたちづくっているということができる。

自我処刑

地獄につづく まっしろな道  
狂気と静寂の最大の範疇をつらぬいて  
光もなく影もなく  
おいつめられた時間の遺跡は  
きらめきのぼる  
それはゆるやかに深淵にめぐられた  
石胎の台  
その上にかれらは立ち  
皇帝のようにオリオンを呼んだ

仄あかい死の松明にてらされた  
村よ 寡婦たちよ  
識られざる命の水を汲んで  
おれの頂きのかすかな懊悩をさませ  
孤独と恥辱と二つの光に曲げられた肉の  
かがやく渴きを去れ  
まだ何ひとつ始まらぬうちに  
われわれは暗いところから飛んできた  
符号にすぎぬ  
あわれな偶然が片隅でもえる世界の  
無数の柱のうちのひとつにすぎぬ  
そしていまおれが待っているものは  
「薄明の力学」にすぎぬというのか

消えろ 塔も王国も  
忘却の足跡をつなぐ長い鎖も  
弱々しい胞子の願いの言葉は  
かれと地球のなかを裂き  
かれの足はすばやく  
灰いろの骰子をふんでいた  
旅行はすぐに終わった  
自我は振子の大いなる錘となって溢れ……

商人

おれは大地の商人になろう  
きのこを売ろう あくまでにがい茶を  
色のひとつ足らぬ虹を

夕暮れにむずがゆくなる草を  
わびしいたてがみを ひずめの青を  
蜘蛛の巣を そいつらみんなで

狂った麦を買おう  
古びておおきな共和国をひとつ  
それがおれの不幸の全部なら

つめたい時間を荷作りしろ  
ひかりは柵に入れるのだ

さて おれの帳面は森にある  
岩蔭にらんぼうな数字が死んでいて

なんとまあ下界いちめん贋金は  
この真昼にも錆びやすいことだ

故郷

おれたちの故郷のどぶ河の  
水底にもだえる赤い蛭よ  
おしだまってる小さな巻貝よ  
戦争で死にそこねた息子達のダンスよ  
おれたちはみな田舎者である

汗くさい雨がふって  
一片の夕暮を買いにきた妻たちが  
窓をつついて去ってゆく  
その窓の彼方にぐるぐる廻る若者よ  
背骨に優しい病気の虫が泳いでいても  
青い眼帯の女につかまって  
おまえはまだやっぱり伍長なのだ

踊り場の二階から馬糞のようなゆうひは  
首つり人の足もとを流れる河に垂れ  
あそこにも瀬戸物の欠けに似た  
おれたち田舎者の心が沈んでいる

## 革命

おれたちの革命は七月か十二月か  
鈴蘭の露したたる道は静かに禿げあがり  
継ぎのあたった家々のうえで  
青く澄んだ空は恐ろしい眼のようだ

鐘が一つ鳴ったら おれたちは降りてゆこう  
ひるまの星がのぞく土壁のなか  
肌色の風にふかれる恋人の  
年へた漬物の香に膝をつくために

革命とは何だ 瑕のあるとびきりの黄昏  
やつらの耳に入った小さな黄金虫  
はや労働者の骨が眠る彼方に  
ちよっぴり氷蜜のようにあらわれた夕立だ

仙人掌の鉢やめじろの籠をけちらして  
空はあんなに焼け：  
おれたちはなおも死神の真白な唾で  
悲しい方言を門毎に書きちらす

ぎ なのこるがふのよかと  
(残った奴が運のいい奴)

@吉本隆明『戦後詩史論』(一九七八・九 大和書房)  
「土壁」とか「年へた漬物の香」とか「ぎなのこるがふのよかと」というような方言が、この詩のなかでわずかにつかわれている現実性であり、このわずかな現実性を、どのような根源的な心情によって取り巻いているか、という問題がこの詩の方法的な課題のすべてである。(略)谷川の根源的な心情によれば、現実の権力をささえてい  
るエネルギーと、これを破壊するエネルギーとは根源的なところで  
同じものであるため、革命とは「瑕のあるとびきりの黄昏」であり、

「やつらの耳に入った小さな黄金虫」のように、社会体制の内側で発生するものでなければならぬ。(略)

成功している谷川の喩法は、現実性と切り離されたところに、幻想的な現実世界を作り上げているものである。

「下部へ、下部へ、根へ根へ、花咲かぬ処へ、暗黒のみちるところへ、そこに万有の母がある。存在の原点がある。」という谷川の思想が、詩においてまったく像として倒置される。

根源的な心情の世界 ↓ 詩では、幻想的に宙に描かれる

現象的なもの、「土壁」「年へた漬物の香」、現実性 ↓ 詩では根源的な役割を果たしている。

日常的なもの、現実的なものへの嫌悪と忌避

戦争期の体験を思想的に倒置しながら再体験しようとする。

根源的な心情に現実性のある暗喩を与える詩法

@北川透「断言的規範の解体」(『現代詩手帖』一九八四・六月号)

革命とは何だ 瑕のあるとびきりの黄昏

やつらの耳に入った小さな黄金虫

はや労働者の骨が眠る彼方に

ちよつぱり氷蜜のようにあらわれた夕立だ

こんなものが断言であるものか。しかし、これを支えているものが、うたがいのなく一つの偏見、思想一般のある色彩への説明なき加担である。メタファとしてしか加担が成立しない。そのことで加担がもつせまい思想的方言や貧しい絶対主義の超越がはかられた。

東京へゆくな

ふるさとの悪霊どもの齒ぐきから  
おれはみつけた 水仙いろした泥の都  
波のようにやさしく奇怪な発言で  
馬車を売ろう 杉を買おう 革命はこわい

なきはらすきこりの娘は  
岩のピアノにむかい  
新しい国のうたを立ちのぼらせよ

つまずき こみあげる鉄道のはて  
ほしよりもしずかな草刈場で  
虚無のからすを追いはらえ

あさはこわれやすいがらすだから  
東京へ行くな　ふるさとを創れ

おれたちのしりをひやす苔の客間に  
船乗り　百姓　旋盤工　坑夫をまねけ  
かぞえきれぬ恥辱　ひとつの眼つき  
それこそ羊歯でかくされたこの世の首府

駈けてゆくひずめの内側なのだ

@吉本隆明『戦後詩史論』  
詩の言葉を思想の風俗として普遍化することで、現実がどうあるう  
と詩の現実は言葉のなかにどこまでも奥行きのある世界をみつけ  
だすことができることを示し得た数少ない政治詩である。

@高橋秀明「皇太子日記」(『ふうりんつうしん』一九八六)  
「ふるさとの悪霊ども」「馬車を売ろう　杉を買おう　革命はこわ  
い」農村から都市に向かう人々の期待や願望

★詩集『谷川雁詩集』(既刊詩集『天山』『大地の商人』に未発表詩  
『伝達』を加えて一冊にした。)一九六〇年刊。国文社

おれは砲兵

海辺にうまれた愚かな思想　なんでもない花  
おれたちは流れにさからって進撃する  
蛙よ　勇ましく鳴くときがきた  
頭蓋の窪地に緑の野砲をひっぱりあげる

神経のくぬぎ林が萌えだす月曜日  
影のようにそよぐ寺院をねらうのだ  
みろみろ　敵の砲弾は村の楽書をぶちこわし  
もやのなかで咲いたあやめが処刑される

電話はどうした　星は青く空は黄に  
それその土色にめまいするわらびにつなげ  
たてよこに蜘蛛の巣をこぐ舟からは  
大昔の先頭命令を鼻歌まじり

うみともつかぬ汁ともつかぬ霰弾をふらす  
空想的社会主義の地獄版め  
純潔にしがみつくあの鶯もやられたか

よし 下男の夢で大地をうち鳴らせ  
裏切りの三角法は計算ずみ  
まっぴるまのどしやぶりを射ちこんでやる  
お望みなら夜明けの棕櫚にはりつけも

娘は運転手を熱愛するくせがあり  
おとなしい子供らが大工になるこの町で  
燃えさかり攣きつる炎はてらしだす  
おれたちのなかの癩を 世界の癩を

杓をぬけ 竜胆色の露ふりはらい  
まぼろしから覚めたきのこよ 馬を呼べ  
句を嘔く物語をかかとにこすりつけながら  
すべての汚辱といっしょに移動しよう

とどまる砲兵には死があるだけなのだ  
蚊ばしら立つ炭焼党の都の方へゆつくりと  
左へ さあ鞭馬の鞭をふりかざせ

★詩集『谷川雁詩集』一九六〇年・国文社  
「あとがき」

私のなかにあった「瞬間の王」は死んだ。ある機能が  
それだけで人間の最高の位であるという思想とたたかう  
ことは、私の知ったはじめての階級闘争であった。逆ら  
いがたく幼年の心を支配していたこの力を飼いならすた  
めに、すなわち観念を猫とみなしてその髭をきるために、  
青年期の十幾年がついやされた。自己の内なる敵として  
の詩を殺そうとする努力が、人々のいわゆる「詩」の形  
をとらざるをえないのは、苦がい当然であるとはいえ、  
私はそれを選んだのでもなければ臨んだのでもなかった。  
眼のまえの蜘蛛の巣のように、それは単純な強制であつ  
た。そのゆえに私の「詩」は単純ならざるをえず、敵は  
自由な饒舌の彼方へのがれ去った。いまや饒舌をもって  
饒舌を打つことが老いるにはまだはやい私のみすぼらし  
い戦闘である。ようやくくにして私は自己運動の平凡な旋  
律の外にあふれようとしている。光とは、なんとおそい

ものである。そしてじぶんの「詩」を葬るためにはまたしても一冊の詩集が必要なのだ。人々は今日かぎり詩人ではなくなったひとりの男を忘れることができる。

一九六〇年一月六日 谷川 雁

## ★評論

「原点が存在する」(一九五四年五月)

「詩人とは不確定な根源的勢力を知覚し、それに対処する心情の発見者である。原点とは、下部へ、下部へ、根へ根へ、花咲かぬ処へ、暗黒のみちるところにある初発のエネルギー、万有の母、存在の原点。」

「けだし詩とは留保なしのイエスカ、しからずんば痛烈なノウでなければならぬ。詩が来たらんとする世界の前衛的形象であるかぎり、その証明は詩人の血をもって明らかにせねばならぬ。

詩人とは何か。

まだ決定的な姿をとらず不確定ではあるが、やがて人人の前に巨大な力となつてあらわれ、その軌道にひとりびとりを微妙にもとらえ、いつかその人の本質そのものと化してしまふ根源的勢力……花々や枝や葉を規定する最初のそして最後のエネルギー……をその出発に先んじて、その萌芽、その胎児のうちに人々をして知覚せしめ、これに対処すべき心情の発見者、それが詩人だ。」

「現代の基本的テーマが発酵し発芽する暗く温かい深部はどこであろうか。そここそが詩人の座標の「原点」ではないか。」

「段々降りてゆく」よりほかないのだ。飛躍は主観的には生まれな  
い。下部へ、下部へ、根へ根へ、花咲かぬ処へ、暗黒のみちるところへ、そこに万有の母がある。存在の原点がある。初発のエネルギーがある。」

「直ちに原点に立とうとあせるべきではない。誰もつねに正確に原点を踏みつづけることは出来ない。また原点は単なるアイデアではない。原点に向おうとする者はまずおのが座標を、その所属する階級の内容を究め、おのが力の働く方向を定めなければならぬ。」

私たちは未来に向かって書いていくのではなく、未来へ進む現在へ向けて書くのだ。偶像を排除せよ！今日の大地に自らの足もとの深部を画け！」

## 「農村と詩」

「自己の内面に存在する農民の発見。この世の革新には故郷が必要。故郷と革命のイメージを噛みあわせることの必要。部落

民と農民とに共通する破格の寛容と平静、それが前プロレタリアートの感情だと理解した谷川雁の体験。」

「魂の地方プロヴァンスと虚妄の都市ストロボリス……」 「問題は農村にある」

「僕のなかに一種の農民が住んでいるだけでなく、その発見が大きさになれば現代日本文明の急所を照らすことができそうに思えたからである。」 「非農民の農民発見」

「故郷とはいったいなんでしょう。」故郷とは自分の存在の歴史を幾世代の因果の微分方程式として見ることでできる地点であろう。すなわちこの世の革新には故郷……自分を構成する古く遠い因果律とそれを動かすための挺子の支点……が必要である。

このことは僕の詩に反映していた。僕の意識の底には故郷があり、意識の表には革命があり、それは乱れた像となって重なった。故郷と革命……この二つのイメージを寸分のゆるぎもなく噛みあわせることが当面の仕事となった。一九五〇年の僕の作品に「故郷」と「革命」の小品があるのはまずそんな理由からだ。

「東京へゆくな」と僕が詩で呼びかけたのは、政治スローガンよりもっとナマな叫びなのだ。なぜなら出発の前にすでに敗北している道よりも百人に一人が真の生活を発見するかもしれない道へさそふことが必要だから。

僕が拳を握るのは東洋の村の思想だ。

いたずらに個人の自立性のとぼしさを歎く前に、共同体の連帯感をほり起こすことの方がよほど「自立的な」考え方であるとだけ言うとおこう。

僕が自分のなかに詩を自覚した最初の二行……

おれは村を知り 道を知り

灰色の時を知った

ここへまた僕は帰ってきたのだ。

### 「現代詩の歴史的自覚」

【吉本の「知識人の戦争責任論」への批判——インテリの戦争責任追及より庶民の内部を突く必要がある。沈黙の大衆の底部の負の記号をもつ工作者（原点）と前衛の結合の回路を開くもの——工作者の意味】

戦後詩の特徴 ①同時代への感覚（戦後始めて量的な左翼が形成されたことと切り離せない関係にある。）②加害者としての受難。（傷つけ傷つけるかもしれないという恐怖がはじめて詩の内側へ入り込んだ）③感動の普遍性に対する不信。（自己の内部そのものが分裂し

ている事実根ざしている。④規範の崩壊もしくはその裏返しとしての伝染力のすみやかな速度)

〔吉本の「知識人の戦争責任論」への批判〕

吉本隆明の戦争責任論は詩の領域における六全協とでもいうべき判決となった。

「荒地」の詩はすべて生活の倫理亡き倫理であり、吉本の詩だけは生活の倫理であると書いたが、彼にも六全協にも欠けていたものは場の観念だけでなく、場そのものであった。

なぜ庶民そのものの内部を突かないのか。それによって「戦争」からエネルギーを汲まないのか。戦時民衆の「軍国主義」に戦後民主主義の母体を発見することで、日本の抵抗運動の不連続性を打ち破らないのか。

戦後詩の特色が、被害者としての傷の共有による同時代意識と見られているが、それは「みずから選びとった加害者の位置で受けた傷の浅さから生まれた同時代意識」なのだ。その加害者は、多かれ少なかれ私のような半知識人であった。手傷を負ったインテリという主題は、思想と行為をすり抜けて、分解過程に入っているのが、詩の現状だ。

戦後史詩の貴重な経験は、吉本隆明が指摘したように、前衛詩人の内部が分裂していることの発見である。しかし、吉本は自分の分裂を放棄して、そこから上づつた道徳的攻撃を加えた。大衆の深みから打たなければ、蚊のような知識人の一匹すら血を流さないのである。吉本の提起した命題の転回こそ現代詩の課題である。

われわれの内部は分裂している。その枝の延長上に日本の前衛と大衆の分裂がある。

吉本がいうように、庶民が人民になり、人民が前衛になるという昆虫の変態に似た論理で一方的に律しきれるものではない。それは根底において人間蔑視の思想をふくんでいる。われわれがもし、正の記号を持つ工作者であるならば、負の記号を持つ工作者が沈黙している大衆の底部にいたのだ。私有を離れようともだえながらなお不可避の占有を拡大している者に対して、私有の形式では絶対に所有することのできない者が存在する。私はこれを「原点」と呼ぶ習慣であるが、前衛と原点の結合、ここに回路を建設するものこそ工作者ではないか。

### 「権力止揚の回廊―自立学校をめぐる」

【自立の思想を組織論的に展開したもの。自立学校の構成法】  
自立とは唯一神を切る法である。生きている思想には確固たる一つの約束事がある。思想のどこか一か所に、表からも裏からも変わら

ない符号の一義性が、あたかも、一個の自然のように存在していなければならぬ。

自立の観念は円環不能でなければならぬ。そこに絶縁し合うことによる媒介、特殊な契機を挟むこと。自立は、状況論的には内的闘争のイデアである。支配されぬという脈絡、すべての思想的な力の強制に対する拒絶に積極的な力の源泉を求める立場をとる。

自立学校の構成法（自立者を学校という機構で創出する、権力止揚のための権力の奪取の構図）

a それぞれが、全一的で完全に無力、b 相互緊張関係と全公開、c 指示機能の伝達は第三者を中間に置く、d 指示される側に拒否権を持たせる、e 権利と義務の観念を倒立させ、意識体系を発展させる。

#### 「地方―意識空間として」

【敗戦を終戦と言い換えた戦後の擬制。地方対中央というような対位的な思考ではなく、情況の不在が情況として展開しているという「地方」を意識の新しい空間として追求する必要。】

きみ―「おれの四人称」、現存したことがない。おれをこの世に向かって追放する者。

無数のきみたちと一人のおれによって囲まれるこの意識空間を、一つの円環化された領域とは考えないゆえに、「地方」と呼んでいることを、君たちは了解してくれよう。いかなる閉じられた円環体にも、おれは属していない。また、それへの没入を必要としていない。

太平洋戦争とは何であったのか。

すべての戦争論は「メラネシア土着民」の観点から書き換えられなければならない。

「終戦」という用語によって「国体」「護持」の観念が隠され持続している―天皇制。

天皇制こそは、あのプロレタリアートの実存といわれるものと紙一重の擬制であり、いわばウル・スターリニズムだった。進歩派がこれを歴史の遺物視し、そして支配層がたくみにその人民Ⅱ実体、天皇Ⅱ虚体という図式を、国民Ⅱ主権、天皇Ⅱ象徴という図式にすりかえたとき、進歩派の実体主義が今日のようなスターリン主義的第三円環と、亜スターリン主義的小円環の二種に分裂したまま、それぞれ完結していくという事態の青写真はできあがっていたといえよう。

「地方」という観念―総体としての現在と未来からそれぞれ逆の方向に、二重に追放されている人民的意識態の運動域と規定する

地方対中央という対位法は常に円環構造から抜け出せない。

平和からも戦争からも、常態的な階級闘争からも締め出されている領域、情況不在が情况的に展開している「地方」を、意識の新しい空間として人民的意識態の視野から追求することが必要。中央対地方という対位法によって形成されていた意識空間は、前衛対人民という対位法をもった意識時間への質的転換を強いられることによつて、その空間性を剥奪され、地方そのものの不在という意識時間をうむにいたつた。

★「現代詩文庫」所収外の谷川雁の評論

「わが代表作」(一九五七年八月「詩学」臨時増刊 掲載)  
詩「おれは砲兵」

代表作とは何か、よく分らないが自分の悪癖がはつきりしているという意味で選んだ。五年五月に書いた作品である。当時私は胸の手術を受けるため入院していた。共産党のいわゆる六全協決議が発表される少し前のことで、私とほぼ同じ頃誕生した党にとつてやはりある種の手術が避けられないことはすべての風聞から隔絶されている草深い病室の中でも感じられた。(略)一般的ヒューマニズムへの侮蔑、それがこの一篇の主題である。(略)

だからこれは単一の事件によつて触発されたものでなく、体験の連鎖の上に立つたある種の政治詩である。(略)(党内規律に触れないように配慮して彦坂)つまり直接政治的範疇を提出することを避け、いわば**文学の領域**それ**自身から政治を刺そう**とつとめた。

それは黨員でなければ直面しない性質の問題に見えながら、実は深く自由の本質に関わる方法上の一点と思われた。由来、文学とはすでに非公認の思想である。ものとの微妙で危険で新しい関係が言語の世界で追求されるにつれ、それが革命党の公認された現在地点の思想と当面的に矛盾しあうことはむしろ常態といわねばならぬ。文学に対する政治の前衛的態度とはまさにこのような部分的矛盾の存在を進んで容認しつつ、より高次の統一に至る出発点を目下の規律のうちに求めることである。(略)コミュニスト詩人たる者の切実な課題はどんな微細な矛盾をも見逃さずに「表現の自由」を拡大してゆく戦闘的姿勢を保持することであろう。(略)

右の理由から私はまず隠喩だけで描き切つてやろうと考えた。その弱さをむちうつために命令形や間投詞をふんだんに使つた。

悪どい色感とユーモアを少量混じえた。

軍隊で輓馬十五榴(榴―榴弾砲・車に据えられた大砲彦坂)に所属したから砲兵の気分は分かっている。前年に癩院へ行つて道徳的苦戦をなめたことがあるのでその感触も入りこんだ。困つたのは第一連三行の「蛙よ 勇ましく……」が希望するほど強く反りか

えつてくれないことだった。その迷いが最後まで残ってしまったと思う。完成に要した時間は三十日。(略)

『原点が存在する』所収(弘文堂 一九五八年十二月刊)  
「無を噛みくたく融合へー現代詩がめざしているものー」

(一九五八・六月「文学」『原点が存在する』所収)

失明した眼には何が見えるだろうか。破れた鼓膜には何が聞えるだろうか。我々は詩を信じるかぎり、すくなくとも彼等が見かつ聞いている、という事実を人々に伝達しなければならぬ義務を持っている。

\*

「言葉が実在感覚と論理の交点ではじめて肉体を持つ素材であることとはいうまでもない。」

「防衛する無と攻撃する無が。この二つの無の葛藤を促進する触媒が我々の詩でなければならぬのではないか。」

「私は自分のなかに二種類の人間：プラス・プラスとプラス・マイナスの人間がいることを確認し、その争闘の最大値をもつて統一の契機——加害者の思想が現代文学の必須の柱であることを主張する。」

「プラス・プラスの極点にある空洞、それはマイナス・マイナスの極点にある実在感覚と結ぶことではじめて満ちるのである。いやおうなしに私の道はそこを通らざるをえない。」

「断言肯定命題」(一九六一・四月号「詩学」『影の越境をめぐって』所収 現代思潮社)

\*命題・真偽を判定することのできる文。また、その意味内容

「断言肯定命題」

【否定性の中にある客観的積極性を肯定できない人間は詩を書くことが出来ないからやめることも出来ない。不可視の否定的な力の肯定が詩の論理。——この逆説的思考なら詩作の持続は可能なはずだが、なぜ、谷川雁は詩作をやめたのか。それは詩の論理を「一かゼロ」という二者択一の思想に結ぶところにあつたのではないか。詩の二重性、多重性？を見ながら、二項対立的なところではしか選択肢を考えないという矛盾がある。この矛盾は谷川雁の詩の言葉と思想の言葉のなかにも散見されるもので、それが谷川雁の行動を突き動かしていたもののように思う。】

「すなわち詩の出発点はうたがいもなく一つの偏見、思想一般のある色彩への説明なき加担であり、」

「私が詩作をやめたのは、おのれの断言癖や肯定癖が詩作にさしさわりを生じたというようなことではない。詩とは無言に否定的にひるがっていく世界への断言的肯定以外の何であろうか。もちろんこ

こでいう命題とは、書かれた命題ではない。一篇の詩に内在する命題のことである。その点で、いかに現実の迷路がするどく描かれていようと、否定的命題しかはらんでいない詩は、いわば散文の代用物でしかない。人間が最後の疑問につきあたるとき、その衝突がたとえどのような否定的な光を放とうとも、それは客観的積極性を持つ。それを肯定できない人間は詩を書くことができないから、詩をやめることもできない道理である。

詩の論理はあくまで一かゼロか、白か黒かであり、その中間はありえない。詩の論理はどこまでも潜在する不可視の否定的な力に對するためらうことなき肯定であり、その外にはありえない。」

★ 工作とは伝達の可能性を信じることです。伝達の困難を知ることでもある。「工作者の論理」

★ 谷川雁についての北川透の評論

北川透 「危機の詩人たち」(『あんかるわ』創刊号)

「詩と反詩の間」(『詩と思想の自立』所収 一九六六・二 思潮社)

「詩と反詩の間で甦えるもの」(『情況の詩』所収 一九七一・四 思潮社)

「夢みられたコンミュン」(『幻野の渴き』所収 一九七〇・九 思潮社)

「悲観的ユートピアの止揚」(同)

「内視的主格の陥穽」(同)

「真空掃除機の孤独―谷川雁の詩語轍断」(『現代詩手帖』二〇〇二・四 思潮社)

他多数

【北川透 「夢みられたコンミュン」

「村」とは何か

黒田喜夫の批判「農民的現実と谷川の詩の中の村との落差」

北川透の意見「実体性のない『村』であり、谷川の夢の開示と理解して初めて「ふりつむ雪の宵のような光のなかで／おのれを断罪し 処刑することを知った」に接続する非現実の世界との内的なつながりを得る。自己の内なる私意識、自我を処刑するにふさわしい場のイメージとしての『村』を求めた。

自我処刑の痛みのイメージ|| 夢見られた『村』の優しさ|| 谷川の詩意識の原質

【北川透「詩と反詩の間」】

「谷川雁詩集一冊に凝集している想像的意識の核は、むしろ未来と過去から二重に追放されている現在の時間のなかに、人間がなおも、その存在を主張しようとするとき、どのような主体的時間をもたなければならぬかということだ。谷川にとって、まず反近代があったのではなくて、そこに奪いとられた時間があったのである。その一つは軍隊であり、今一つは戦後革命運動の徹底的な敗北という事態である。そこには過去と未来からこの詩人を二重に追放しようとする空洞化した状況があり、その状況と対応した詩人の内部の尖鋭な危機感があったはずである。」

【北川透「詩と反詩の間で甦えるもの」】

（谷川雁の沈黙に対して黒田喜夫の批判『詩と反詩の間のコンミューン』に対する北川透の反論として書かれた文だが、谷川雁の思想の在処が、簡潔に十分に語られているところを参照したい。）  
《東洋の村の底にある共同社会のヴィジョン、農本主義の逆転としての桃源郷の夢や安息の浄土の幻を感性のコンミューンとして甦生させるといった谷川雁の思想としてもつとも不毛であるところ、しかもその不毛の占有を通じて、彼が詩的表出を成り立たせ、硬直したスターリニズム的政治思想に対する工作者の思想の鮮烈な優位性を獲得したところ。》

【北川透「真空掃除機の孤独―谷川雁の詩語轢断―】

《プラス・プラスの極点にある空洞、それはマイナス・マイナの極点にある実在感覚と結ぶことではじめて満ちるのである。いやおうなしに私の道はそこを通らざるをえない。》「無を噛みくだく融合へ」（一九五八）

この《プラス・プラスの極点にある空洞》とはなんだろう。今回、あのアフオリズム「原点が存在する」を読んで閃いた。うすうす気付いてはいたが、確信した。これはヴァレリーなのだ。一九四三年、陸軍応召前の谷川雁が乱読したものの中に、ヴァレリーがあったことはよく知られている。（略）「原点が存在する」の冒頭は、ワグナー歌劇のことから書かれている。ヴァレリーの「序言」もサンボリズムの音楽の説明は、ベルリオーズとワグナーを引くことで始められている。

《絶対詩は異例な奇蹟によらぬ限り行なはれ得ない。悉く絶対詩より或る作品は一文学の無価の宝の中にあつても、そこに現はれる最も希有な、最も有りさうにもないものである。而も、到達することが出来ず、絶え入るばかりの努力を重ねない限り、近づくことさへも許さぬ完全なる真空の如く、又、最低温度と同じく我々の芸術の究極の純粋性は、之を心に抱く人々に、結局決して満足させられることがないといふ矜持のみをのこして、詩人たる本来の悦びを悉く吸ひ取つてしまふほど、長い苛酷な拘束を要求する

のだ。》（「序言」）

ヴァレリーが絶対詩とも純粹詩とも呼ぶ、この絶え入るばかりの努力、プラスに次ぐプラスの果てに、ようやく近づくことぐらいはできるかも知れない完全なる真空。空洞。しかし、谷川雁によればこの無価値の、純粹の、絶対的な宝物を、たとえ手に入れることができたとしても、それだけでは、アジアの日本の《我々が突きあたっている否定の表現の十字形》を《決して解くことができない》というのである。なぜなら、《プラス・プラスの極点にある空洞》、ヴァレリーの真空とは、玉座であり、王位であっても、それ自体は王ではないからだ。そこに《マイナス・マイナスの極点にある实在感覚》が結び付けられる理由がある。そのマイナスの極点に設定されるものが東洋の村であり、部落であり、差別の実態であり、炭鉱地帯だり、その生活感覚なのである。こうしてプラスの極とマイナスの極をスパークさせて、マイナスをプラスに転換するために、《凝縮につぐ凝縮で追い込》むことが、谷川の戦略になる。

しかし、ムラも差別も炭鉱も、それだけでは単なる生活リアリズムの住人を映し出すに過ぎない。ヴァレリーの真空という玉座には、それにふさわしい王が必要だ。東洋の村、部落、朝鮮人、炭鉱、それらの無限の優しさの源流としての、原始共産社会の非所有の感覚、それを一身に体现している王、カミと言ってもいい人格こそが毛沢東だった。

要約・毛沢東の実態とイメージの落差を暴力的に消すのが《凝縮につぐ凝縮で追い込》むメタファアの詩法である。それを語っているのが「毛沢東」という詩。《ひとすじの苦しい光のように》立っている毛沢東の像。この《無の造形》には、おそらく谷川雁の

戦争体験と、戦後という時代が深くかかわっている。《無》とはプラスマである。プラスとマイナスがスパークすること。詩「人間A」の《彼》は純粹毛沢東、原始毛沢東。これらは社会主義や共産主義への信仰や、ユートピア幻想の中にしか存在しない。

【北川透『像の不安』「恐怖の言語へ向けて―詩の価値・序説―」  
「断言肯定命題」は一九六一年初め。詩の価値論である。詩の世界は、《列島》《荒地》以後の新しい詩の価値が問われる状況にあった。

〈広辞苑〉

・庶民―① 諸々の民、人民。② 世間一般の人々。平民。大衆。

・人民―① 国家社会を構成する人。特に国家の支配者に対して被支配者をいう。

・前衛―① 前方の護衛。② 行軍の際、本部の前方にあつて進路上の障害を排除し、また捜索をして本隊戦闘の初動を有利にするなどの任務を帯びる部隊。④ 芸術運動で、最も先端的なグループの称。アバンギャルド。⑤ 階級闘争における最も先端的な部隊。「前衛党」

・アバンギャルドー（前衛の意）

- ① 軍隊用語で、本隊に先駆けて偵察、先制攻撃を行う小隊。
- ② レーニンによる①の革命運動への転用。大衆の自然発生的反抗を組織する革命集団・政党。
- ③ ②の芸術分野への転用で、二〇世紀初め以来ヨーロッパでの既成の通念を否定し未知の表現領域を開拓しようとする芸術家・芸術運動（立体派・表現派・ダダイスム・抽象派・超現実派など）を指す。一九七〇年代、大衆社会の爛熟のなかで衰退。前衛派。

〈ブリタニカ国際大百科事典〉

六全協・・一九五五年七月に開かれた日本共産党第六回全国協議会の略称。共産党がそれまでの極左軍事冒険主義を転換し、今日の先進国型平和革命路線に踏み出す、歴史的意味をもつ会議とされる。それまでの五一年綱領は事実上の軍事革命路線であり、五二年以降の火炎瓶闘争はその実践であった。六全協ではこの路線の推進者だった徳田球一、志多重男の主流派と、この路線の批判者である宮本顕治の国際派が妥協したがって路線批判はまだあいまいだったが、六全協直後に志田は失脚し、宮本が優位に立ち、翌五六年七月の第七回党大会で、五一年綱領は廃棄され、宮本が書記長に就任、新路線の推進、確立に向けて歩みはじめた。